

2つの経験から

大学時代、体育会ラグビー部の女子マネージャーとして活動していた。卒部後、タグラグビーで体を動かす機会があった。法律事務所で働く今も、①女子マネージャーとしての経験、②タグラグビーを通しての経験が、多少活かされているような気がする。

法律事務所職員

北野 真知子

女子マネージャーを経験して

もともとラグビーを観るのが好きで入部したが、時間や労力を費やしても無報酬なので、部の一員としてモチベーションを保たねばならないことに煩わしさを感じることもあった。しかし、選手が目指していること、求めていることをグラウンドの傍で何となく汲み取れるようになると、くだらない雑用さえも面白みを感じるようになっていた。

また、秋本番の試合を闘っていくと選手の体はボロボロになり、天候も相俟って常に最高のコンディションを保つことは難しくなる。しかし、その時々与えられた状況で、女子マネージャーとして何ができるか、どうしたらチームの勝利に寄与できるか、考えるようになっていた。

事務職員として弁護士の下で働く上でも似かよった面があると思う。指示を受けて仕事をするのに、弁護士の意向をサラッと汲み取ることができると動きやすい。その時々意図されていることを上手く察知できると細かな仕事であれ楽しい。

また、依頼者も千差万別で、事案も多種多様。法律事務所にとって都合のよい状況ばかりではないが、その場に応じて事務職員として何ができるか、どのような対応が好ましいか、考えることは大切だと思う。

タグラグビーを通して

タグラグビーとは、ラグビーから接触プレーをなくし、タグ（ビニール製リボン）を左右両腰につけて、相手陣地にボールを持込むことで点が得られるスポーツである。タグを取られた（ラグビーで例えるとタックルされた）場合は、ボールを持ったまま前進することができなくなる。ラグビーと同様、楕円球を使い、前方にパスすることはできない。ボールを前に投げずにどうやって運ぶ

のか、やはり軽快なパス回しが鍵になってくる。

タグラグビーをプレーして印象に残った言葉がある。「ナイスアシスト」というフレーズだ。ゴールを決めた選手は甚だ注目されがちだが、タグラグビーではボールがゴールまで持込まれる過程を尊重する風習がある。ボールに一瞬でも触れ、次の選手に引継いだ者は得点にアシストしたことになる。確かに、仲間からパスを受け、仲間へパスをしてボールを進めていくと、まるで皆の思いを運んでいるかのような気持ちになる。自然にボールを大事に扱いたくなってくる。

法律事務所で働く上でも然り。依頼者から電話を受け、弁護士に取り次ぐ。とても些細なことでも依頼者の思いを大切に上手くパスできれば「ナイスアシスト」になり得る気がする。勿論、弁護士のようにゲーム展開を左右する大きなパス回しはできないが、指定された場所に無駄なくパスができれば、解決困難な依頼、激務に追われている弁護士にとっても少しは執務がしやすい環境になると思う。おそらく勤務し始めた頃はビックリするような所に下手なパスを飛ばして多々迷惑を掛けていたと思うが、あまりぶれないよう少しはましなパスが投げられた時には気分もスッキリする。弁護士が描く大まかな道筋から外れることなく、基本的な倫理を理解し、いつでもパスが受取れるような姿勢でいることも必要なかも知れない。

最後に

2つの経験を通して私は、表舞台に立つ者の意向を汲み取り、状況に応じて対応をすることの大切さ、そして、小さなパスでも味方がプレーしやすい場所に丁寧に繋いでいくことの大切さを知った。法律事務所職員としてまだまだ修行が足りない日々ではあるが、この経験を踏まえ「ナイスアシスト」を目指していきたいと思う。